



TITLE:

『七夕祭』に就いて:和歌山に於ける(日食報告號)

AUTHOR(S):

CITATION:

『七夕祭』に就いて:和歌山に於ける(日食報告號). 天界 1936, 16(184): 404-406

ISSUE DATE:

1936-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167270>

RIGHT:

『七夕祭』に就いて 一和歌山に於ける一

1 起 原

1 語 原

「タナバタ」は棚機津女タナバタツメ(機を織る女)の略で古く機織ハタオリをよくする女の事を言つたものです。和名鈔といふ書に織女と書いて「タナバタ」と読んでゐます。天空に織女星といふのがあります。此織女星を棚機姫に附會してタナバタといひ、更に7月7日の夜の事を「タナバタ」といふ様になつたものだといひます。

2 支那の傳説

昔「天河」の西に天帝の子、織女があつて機杼勞役について年中容姿をおさむる邊がなかつたから天帝は其の獨居を憐んで河東の牽牛の所に嫁せしめしが其の後織女が機織をやめたから天帝が怒つて河西に歸らしめ1年に1度7月7日の夜だけ天河を渡つて相會する事を許した。此時は鵲が羽を並べて橋となし之を渡つて相會する其の日雨であつたら會し得ない云々」支那の七夕は此傳説から來たもので、文人墨客が之を詩歌に詠じ我國人も和歌に詠じたもので、之が一般に流布されるやうになつたのであるが、我國の七夕祭はこんな狭い而も纏綿たる情緒を意味するものとは趣を異にしてゐる。

3 我國の七夕祭

我神代に天棚機姫神といふお方があつて、神様方の織物をお作になつてゐたので、丁度織女の機織に巧なのと相通する點があるので、古來織女星は我天棚機姫の神だとの信仰から陰曆7月7日の夜、此天棚機姫神をお祭することになつたのが所謂七夕祭で、一名織女祭或は星祭といふのである。そこで古來婦女子が機織、裁縫、手藝など手わざのものをお供へして其の上達をお祈りしたのであるが、後だんだん轉じて短冊に詩歌、俳句などを書し、子供は習字、繪畫などを書して手蹟の上達を祈り、又農夫などは田畑の作物をお供へし、其の他各人各様に自己の手わざになれるものをお供へして、上達をお祈りするやうになつたのである。

要するに我國の七夕祭は支那の直輸入ではない。形に於いても日本化し精

神に於ては固有獨特のものである。

2 郷土教育施設の一として七夕祭を実施する理由

1 神秘なる天體宇宙自然に對する感謝の念の涵養

現代人は科學即ちサイエンスを過信して、之に中毒して宇宙間の總てのものは、科學文明の力で解決出來ると信じてゐるものが多い。科學の奥底に更に絶対に科學の力では解決出來ない宇宙自然の神秘、神聖のある事を忘れてゐるものが多い。

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる (西行法師)

これは科學の力によつては其の心境は説明出來ない。我々は大森林の中を行くとき、大自然の中に佇むとき、深夜滿天の星を眺むるとき、そこに宇宙自然の偉大なる力、神聖への憧憬を感じずにはゐられない。

此宇宙自然への感謝、神聖への憧憬はやがて宗教心であり、一面吾人の生活に非常なるほひを與へてくれるものである。此意味に於て我國古來の風習たる星祭を実施したいのである。

2 兒童の世界を擴めたい

大人には大人の世界があるやうに、子供には子供の世界があるべきである。然るに西歐文明の輸入以來知識教育萬能の結果、子供の世界は縮められ、やれ勉強、やれ宿題と寧日兒童は學科の勉強に追はれて神經衰弱的となり、一片の紙人形をもお父さんと見お母さんと見、一握りの土塊も御馳走と見てたのしむ、神の如きうるはしい子供ならでは味へぬ世界のだんだん狭められて行くことは誠に可哀さうである。我々は出来るだけ朗かで、うるほひのあるなどやかな子供の生活の擴充を計らねばならぬ。

3 成績向上の一施設として

イ七夕祭は兒女の裁縫、手蹟の向上を祈るお祭りであること。

ロ「ボンボリ」に書く歌、文字、圖畫、貼る手工、笹に吊るす短冊に書くもの、すべて神聖なる心持にて然も魂を打ち込んだ立派な成績物が出來るだらう。たしかに成績向上の施設である。

ハ 燈火を通して鑑賞する展覧會として

從來の成績品展覧會は晝間夜間を問はず、成績品の表面に光線を受けて之れを眺めるのであるが、七夕祭の製作品はボンボリの中に燈火を入れ、紙の裏から光線を通して眺めるのである。それだけに一層工夫を要するわけで、創造心が養成されることになるのである。これが第3の理由である。

4 郷土愛好の精神—愛國心—の養成

郷土を愛する精神は、やがて國を愛する精神である。私共は自己の幼時の追憶をたどる毎に身は伏虎城下にゐても、思ひは郷里の空に飛んで行くのである。村のお祭、盂蘭盆のヒトモン其の他村の種々の行事に父母に手をひかれて行つた時の記憶が語るべき父母もなく、齡而立にして尙眠のあたり浮んで來て、なつかしき故郷へと思ひを寄せることが度々である。科學生活……能率増進……スピード教育もとより緊要であるが、これのみにあくせくとして、なごやかな自然と握手したゆつたりした教育と離れんとする現代教育、特に小學校教育に一種の反感さへも持つことがある。これが第4の理由である。

5 郷土祭として

郷土の發展は郷土民相互の協力共榮にある。之が中心をなすものは小學校であると信じてゐる。學校を中心としてお互に手を握りあつて行くことが大國民發展の要素である。此意味からして當七夕祭も、學校を中心とした區民の夏祭としたいのである。小學校だけの催ならば他に學藝會、展覧會、遠足、運動會其の他種々の方法もあるが、一步進んで區民、否郷土民の祭として、せめて年1度の此催だけは兒童と其の父兄に限るといふやうな小さい量見を捨て、全區民、大にしては全市民を打つて一丸とした夏の夜の楽しい集ひとしたいのである。それでボンボリにしても出演の如きも、兒童に限らず、青年學校生徒、婦人會、在郷軍人會は勿論、全區民こぞつて出演（勿論教育的演題たるは云ふまでもない）するやうにしたいのである。これが第5の理由である。以上

今年の七夕祭は8月23日(舊曆7月7日)である。